城跡芸術展

SHIROATO ART EXHIBITION

ARCHIVE BOOK

文化庁
令和４年度
文化庁 文化芸術創造拠点形成事業
かめおか霧の芸術祭
Kameoka KIRI Art Cultivation

Table of contents

城跡芸術展について …… 02

参加作家
- みろく会館 …… 05
- 中庭 …… 16
- 春陽閣 …… 20
- 花明山植物園 …… 30

作家略歴・作品について …… 36

関連イベント …… 42

丹波亀山城跡（大本本部）

花明山植物園

ACOON HIBINO
加納俊輔
八木良太
安藤隆一郎
明主航

みろく会館

松井利夫
吉田伊佐
稲あゆ美
出口鯉太郎
西久松友花
西久松吉雄
渡辺信喜
柞磨祥子
大村大悟
小松千倫

春陽閣

YUKOKIMOTO
ベリーマキコ
大石早矢香
奥村博美
クリスティーン・フリント・サト
金重尹郎
荒井優作
栗本夏樹
森太三

中庭

WONG Chung Wah + FOK Ching
岩野勝人
黒川徹

城跡芸術展

丹波亀山城に登った。
保津川を北に望む丘の上に築かれた城跡から、さぞ美しい川の景色や山並みが見えるのだろうと登ってみると、突然、真っ青な球体のような空が降ってきた。
そのことに圧倒されながら、じっと石垣にもたれかかって空を見上げていた。神鍋山の火口の底から、丸く切り取られた空を見上げた時の空と同じだな。と思った。奥行きも広がりも無限だと思っていた空が球体になるそんな瞬間があるんだ。
その球体の中に雲が湧き、陽を送り、暗闇の中に虹を架け、星を散りばめ，星明かりで輝くまっさらな球体が生まれる。岩に音が染み込むほどの静寂に耳を澄ましていると、足の裏から響いてくる鼓動がぼくを、ここではないどこかに連れて行こうとする。
亀山のそんな感覚を呼び起こす力を知っていたから、宗教家出口王三郎はかつて荒れ果てたこの城跡に立ち「芸術は宗教の母である」と言ったのだと思う。

今は亀岡と呼ばれるこの土地に引き寄せられるかのように27組の芸術家が亀山城址に集まってくる。
丹の海の土と水で育つ野菜を食べて育った芸術家。
「霜で揉まれた柿は美味い」と言われるように霜で揉まれた芸術は美味いだろうか、今年も楽しみな収穫の季節がやって来る。

かめおか霜の芸術祭 総合プロデューサー
松井利夫

SHIROATO ART EXHIBITION

城跡芸術展について

About SHIROATO ART EXHIBITION

歴史と文化が折り重なる場所である丹波亀山城跡（大本本部）を舞台に、亀岡にゆかりの深いアーティストが展示を行う、かめおか霧の芸術祭の企画展「城跡芸術展」。

水面に映る城壁や、植物園の小道にさす木漏れ日、赤松の林の黒い影、まるで城跡そのものが作品であるかのような会場は1つの文化的聖地となっています。

2020年より丹波亀山城跡を会場とし、展覧会を年に1度開催。絵画や陶器、漆器、インスタレーションに至るまで様々な展示が行われています。これまでの芸術祭で培われてきた関係性から、若手の作家から大御所までが一堂に会することで、亀岡にゆかりのある作家の交流の場としても機能しています。

また、2022年からは新たに、市民から芸術展や芸術祭を支える人材を募集。展示会場として大本花明山植物園（日本の在来種を中心に約1000種類もの植物が栽培、保護されている植物園）や松林、中庭、広場など屋外へも広がり、新たな交流、可能性や体験が生まれています。

2017年にKIRI CAFEを拠点としてかめおか霧の芸術祭が誕生して以来、亀岡ゆかりの芸術家による展覧会は少しずつその姿を変えながら実施されてきました。2018年、「かめおか霧の芸術祭 キックオフイベント ～霧に揉まれた芸術はうまい～」と題して、ガレリアかめおかを会場に8組の作家による展示からスタート。その後は年に1回のペースで開催。2019年には同じくガレリアかめおかで行われた催事「素顔のかめおか」の中で9組の作家による作品展『ガレリア美術館』とその名を変えて実施されました。

2020年には、新型コロナウイルスの影響で1箇所に大人数が集まるような大規模なイベントができない状況下の中、会場を多拠点に分散し、また会期も16日間へと拡大。亀岡市文化資料館や大本みろく会館、みずのき美術館といった亀岡の魅力ある各会場を周遊する形で開催された「めぐるかめおか」の中で『霧の芸術館』と題し、30組近い作家による展覧会へと大きく変貌を遂げました。

2021年にも引き続き『霧の芸術館』と題して30組を超える作家が参加。会場に亀岡市役所「開かれたアトリエ」も加わり、かめおか霧の芸術祭の中でも大きな展覧会としてその重要性を増してきました。

2018

2019

2020

2021

みろく会館

松井利夫
吉田伊佐
稲あゆ美
出口鯉太郎
西久松友花
西久松吉雄
渡辺信喜
柞磨祥子
大村大悟
小松千倫

［凡例］
- 作家名／出展作品名／作品画像を記載した。
- インタビュー映像がWEB公開されている場合は、そのQRコードを記載した。
- 作家略歴と出展作品については巻末（p.36）にまとめて記載した。

Matsui Toshio

松井利夫

「つやつやのはらわた」

interview

Yoshida Isa

吉田伊佐

「草・木・陽」

「上谷の老樹」

「緑陰」

interview

Ina Ayumi

稲あゆ美

「揺蕩う春」

「連なる山」

interview

Deguchi Koitaro

出口鯉太郎

「信楽花入」

interview

Nishihisamatsu Yuka

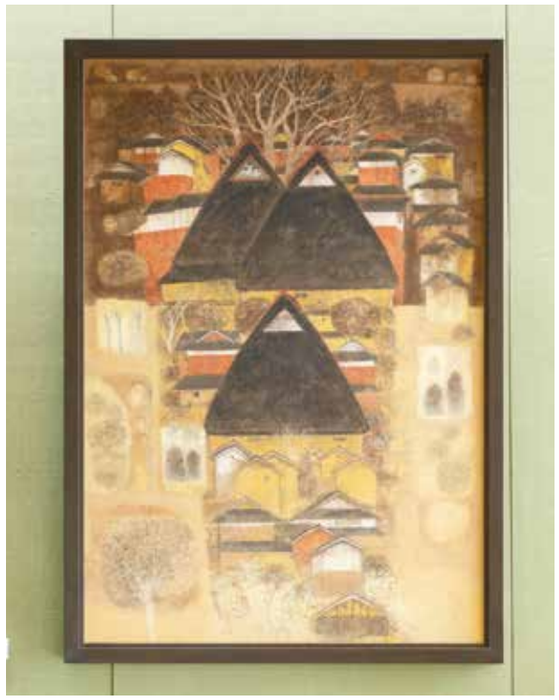
西久松友花

「常花」

「常花」

「炎華」

interview



西久松吉雄

「丹の風景」

「京丹波」

「古社の風景」

interview

Nishihisamatsu Yoshio

Watanabe Nobuyoshi

渡辺信喜

「牡丹」

「茄子」

「蓮」

interview

Taruma Shoko

柞磨祥子

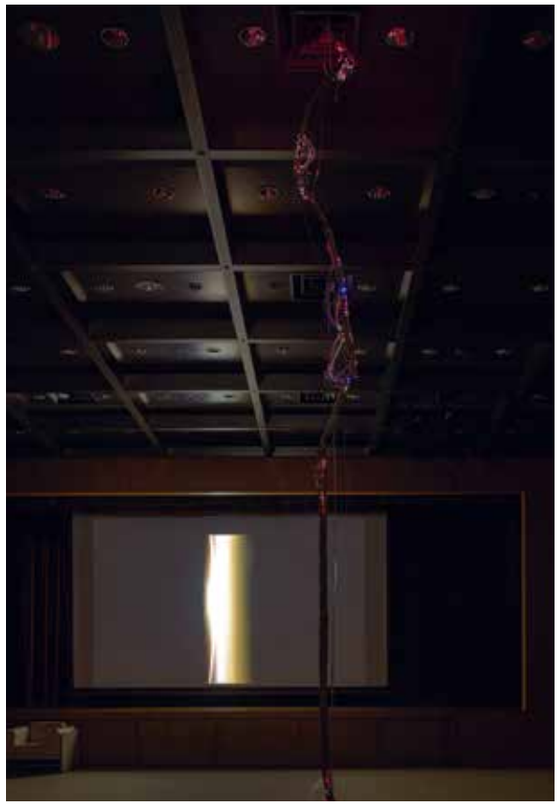
「torsion 2」

Ohmura Daigo

大村大悟

「subject and object」

interview



Komatsu Kazumichi

小松千倫

「Distant of Harmony (Hall)」

interview

中庭

WONG Chung Wah ＋ FOK Ching

岩野勝人

黒川徹

WONG Chung Wah ＋ FOK Ching

WONG Chung Wah ＋ FOK Ching

「もの干し祭り ー共にものを干すプロジェクトー」

interview

Iwano Masahito

岩野勝人

「MENTAL CHAIR Ⅲ」

「HUGE FOOT」

interview

Kurokawa Toru

黒川徹

「アクレーション」

interview

春陽閣

YUKOKIMOTO
ベリーマキコ
大石早矢香
奥村博美
クリスティーン・フリント・サト
金重尹郎
荒井優作
栗本夏樹
森太三

YUKO KIMOTO

YUKO KIMOTO

「My son in wonderland」

interview

Berry Makiko

ベリーマキコ

「一本道」

「もう一つの故郷」

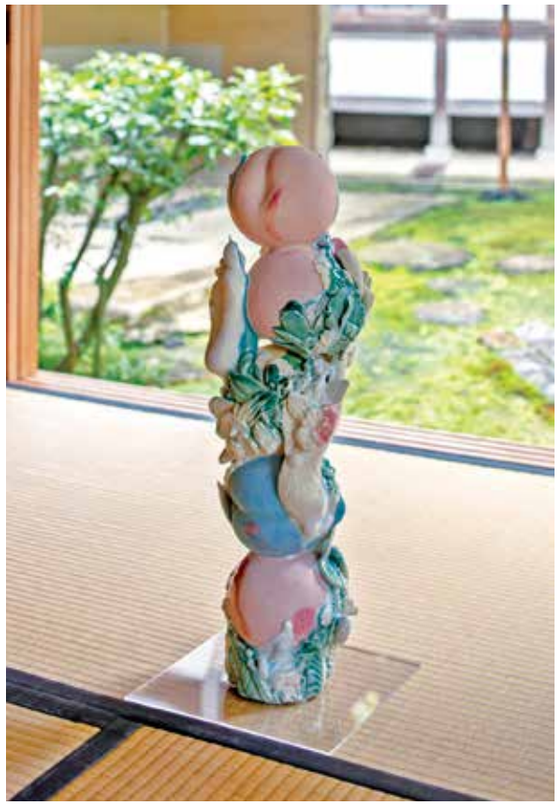
「まわり道」

「Utopia」

「ミノル」

「シトラス」他

interview



Oishi Sayaka

大石早矢香

「双対 ー答えはひとつではないー」

interview

Okumura Hiromi

奥村博美

「緊縛ノ筒」

interview

Christine Flint Sato

クリスティーン・フリント・サト

「折られた円」

「岩を抜ける風」

「雲岩」

「筆から流れる」

「筆からの眺め」

interview

Kaneshige Tadao

金重尹郎

「信楽花器」

「信楽花器」

「備前大皿」

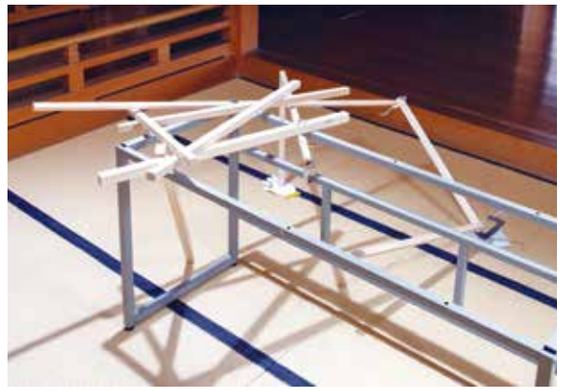
interview

Arai Yusaku

荒井優作

「空、あるいは海」

interview



Kurimoto Natsuki

栗本夏樹

「銀河の茶室」

interview

Mori Taizo

森太三

「海を眺める」

interview

花明山植物園

ACOON HIBINO
加納俊輔
八木良太
安藤隆一郎
明主航

ACOON HIBINO

「サウンドガーデン528」

interview

ACOON HIBINO

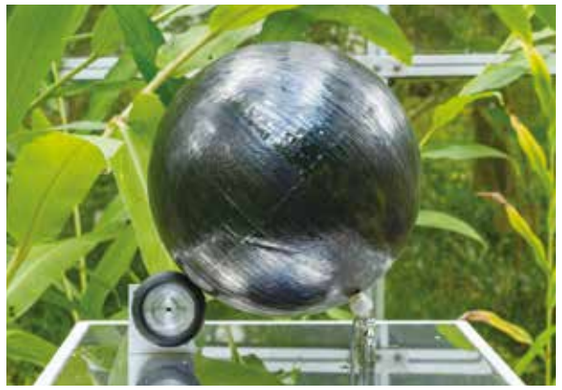
Kano Shunsuke

加納俊輔

「Cool Breeze On The Rocks_05 (Kameoka)」

interview

Yagi Lyota



八木良太

「Sound Sphere」

interview

Ando Ryuichiro

安藤隆一郎

「山ホのデッサン」

「山をホームセンターのようにする。」

interview

Myoshu Wataru

明主航

「匣」

interview

作家略歴・作品について

About the Artists and Works

［凡例］
- 掲載順は五十音順、敬称略。
- 作家名に続き出展作品が掲載されている項を示した。

荒井優作 Arai Yusaku ····· p.27

音楽家。1995年生まれ。
神奈川県出身、京都府在住。表象になり得ないものとしての「音楽」について着目し、サンプリングや朗読などの音声を用いて楽曲を制作。映画や舞台、美術作品の音楽も多く手がける他、自身も立体や写真を用いた作品を制作する。2022年春にはbutajiとのR&Bユニット「butasaku」として1stアルバムをリリース。

—

「空、あるいは海」
人が写真を撮った時、その画像（被写体）には撮影者の自己やその時代の眼差しが色濃く反映される。そのように思うというか、そのように受け取ってしまうのは撮影者にも私にも身体があるからだろうか。

安藤隆一郎 Ando Ryuichiro ····· p.34

染色作家。1984年京都生まれ。
2016年から身体0ベース運用法という「ものづくりの視点」から考える身体論から表現活動を展開する。地域文化や民具のリサーチを通して私たち人がこれまで培ってきた身体技法を明らかにし、指先しか使わなくなりつつある現代において応用することを目的とする。京都市立芸術大学染織専攻講師。

—

「山ホのデッサン」「山をホームセンターのようにする。」
素材を採取し、活用できる目利きと手技を身につけるプロジェクト「山のホームセンター」の手探りのスタートとして今回は敷地内で伐採された丸太や枝を使って小屋のような道具のようなものを制作しました。手探りの中で発見できる小さな喜びを見ていただきたいと思います。

稲あゆ美 Ina Ayumi ····· p.08

1997年京都府亀岡市生まれ。
2021年に京都市立芸術大学大学院美術研究科修士課程工芸専攻染織を修了。高校時代に綴織による タペストリーに出会い、以来その技法により制作している。自分が惹かれるものや日常の中で変化し続ける風景など、この先もいつまでもあってほしいという願いを込めて織っている。

—

「揺蕩う春」「連なる山」
今回地元亀岡で展示させていただくということで、亀岡の景色を作品にしたいと思い、制作しました。「揺蕩う春」は、春に見た朝日に照らされる小川に惹かれ制作しました。小川に反射する周りの植物や山を織り上げることで制作。「連なる山」は、かねてより日記のような作品を作りたいと考えており、自分が生活する亀岡での日々の風景を一枚ずつ下絵に描き、織り上げました。風景と共にその日の風や温度、雲の動きなど、その時にしかないものも描き、織り上げました。どちらの作品もなんて事のないささやかな日々の風景を織っているのですが、こういった日常は最近の情勢を考えるとかけがえのないものと考えさせられ、この先もずっと続いて欲しいと思います。

岩野勝人 Iwano Masahito ····· p.18

1961年徳島県生まれ。
京都市西京区在住。彫刻家。京都を中心に国内外の美術館、画廊等での展覧会において作品を展示。1990年代より美術館や自治体、学校と連携して数々の子どもたちとの造形ワークショップ活動を実践。コミュニケーションツールとしての美術の可能性を多面的に探る活動をしている。

—

「MENTAL CHAIR Ⅲ」
赤い人型の椅子です。ぜひ、座ってみてください。彫刻として景色として眺めてください。外から見るカタチ。座って視覚にはいる赤い人型の彫刻を内から見えるカタチ。どう感じるか、体験して五感で感じてみてください。

「HUGE FOOT」
大きな足の彫刻。大地にしっかりと踏ん張って立つ足。そして上に伸びる脚はどこまでも伸びる。どんな体につながっているかを、想像してみてください。

ACOON HIBINO ····· p.31

滋賀県出身。
作曲家、ピアニスト、画家。50才で528Hz音楽（機能性を持った音楽）を確立する。53才にメジャーデビューし、「心と体を整える～愛の周波数528Hz～」第57回日本レコード大賞企画賞受賞。2018年京都府亀岡市にMoon Studioをつくる。同じく2018年から京都府亀岡市観光大使に就任。多彩なアーティストとして活躍中。

—

「サウンドガーデン528」
エイコン・ヒビノのプロデュースによる528Hzの音と自然の音が融合した「サウンドガーデン528」は、音の力でやすらぎの空間を演出することができます。いくつもの小型スピーカーから流れる音で、今までに経験したことのないリラックス感を提供し、一人でまたは仲間達と幸せなくつろぎの時が過ごせる、体感するための音楽です。

大石早矢香 Oishi Sayaka ····· p.22

1980年京都府に生まれる。
2004年京都市立芸術大学美術学部工芸科陶磁器専攻卒業
生と死を豊かに取り込みながら、独自の装飾美の世界をつくる。個展、グループ展のほか、第43回長三賞常滑陶業展「くらしのやきもの展」長三賞（2014年）、パラミタ陶芸大賞展ノミネート（2017年）、「京畿道世界陶磁ビエンナーレ2019」入選（2019年）、第23回岡本太郎現代芸術賞入選（2020年）など精力的に作品を発表。

—

「双対 –答えはひとつではない–」
答えはひとつではない。日本には「ハレ」と「ケ」の文化があり、アジアには「陰」と「陽」の思想がある。いま私達は「0」と「1」の二進法によるコンピュータで生活を営んでいる。この世は「双対（ソウツイ）」片方だけでは成立しない世界。双対のはざまで、迷い、悩み、考え、選ばれてきたからこそ世界はこんなにも豊かで美しい。

大村大悟 Ohmura Daigo ····· p.14

1984年石川県生まれ。
「道具と身体」「建物と装飾」など関係性の中に生まれる物事の“意味”をテーマにした彫刻作品を制作している。近年は作家活動と並行して民具の調査・復刻製作や特注什器の制作も手がけている。実制作を通して様々な素材や技法の研究を行う一方、「原始的な道具作り」などのワークショップも不定期で開催。

—

「subject and object」
子供の頃、「どこにでも座るのはやめなさい」と叱られることがあった。当時はテーブルや道端の縁石なども座りやすい高さだったのだが、尻を置いてはいけない場合や、服が汚れる場合があった。相対的な関係を知ることの積み重ねで、ものごとの意味を学んでいったように思う。

奥村博美 Okumura Hiromi ····· p.24

1953年　京都府京都市生まれ
1978年　京都市立芸術大学陶磁器専攻科修了
1979年より京都府亀岡市で作陶。個展を中心に作品を発表、現在新たな技法を取り込み、技法に溺れず技法に寄り添い、時には弄んで生まれる姿を模索中。

—

「緊縛ノ筒」
指先が使えなくなって細かい作業が出来なくなり、芯を作って土を貼り付け包帯で縛る、という方法に行き着きました。極度に柔らかい土を使い、土の艶かしさが出せればと思いながらこの技法から現れる形を探しています。

金重尹郎 Kaneshige Tadao ····· p.26

1947年岡山県備前市生まれ。
五歳から高校卒業まで亀岡で過ごす。1970年東京芸術大学彫刻科卒業以降彫刻、陶芸、絵画（ドローイング）コラージュなど、多岐にわたる創作活動を展開する。各地で個展、グループ展を

開催、現在に至る。

—

「信楽花器」「信楽花器」「備前大皿」

焼き物というものは土なくして成り立ちません。いわば大地からの恵みを頂いているわけです。そのありがたみを肝に銘じて制作しています。

加納俊輔 Kano Shunsuke …… p.32

1983年大阪府生まれ。
2010年京都嵯峨芸術大学大学院芸術研究科修了。現在京都在住。写真（を撮る／を視る）を主なメディアとして扱い、イメージと物質の関係性についての考察を軸に、「視る」という体験を捉え直す試みとして平面、立体、映像と多岐の表現形態で展開している。
また、上田良、迫鉄平とのユニットTHE COPY TRAVELERSとしても活動。

—

「Cool Breeze On The Rocks_05 (Kameoka)」

自身が撮影したスナップ写真を亀岡の町の中で眺めてみること—写真を眺める環境を変えてみることで、どのように「見る」ことに変化が起きるのか。過去にどこかで撮影した写真と、今目の前にある亀岡の町が接続したり、あるいは全く関係を結ばなかったりの連続の中で、写真や目の前の風景に、少しこれまでと違う光景を見ることができればと思っています。

クリスティーン・フリント・サト Christine Flint Sato …… p.24

墨アーティスト、英国人、奈良在住。
故・川邊精華師に書を学ぶ（毎日書道会）。中国の芸術家李庚師に中国水墨画を学ぶ。日本・英国で個展を開き、多くのグループ展に参加し、賞も受けた事がある。さらに墨ワークショップを英国と日本で開く。日本書道の線、余白を分析した本「Japanese Calligraphy:The Art of Line and Space」を1999年、墨芸術を新しい角度から紹介したワークブック「Sumi Workbook」を2014年に海風社より出版。

—

「折られた円」

マクロの世界である大きな構図とミクロの世界である細かな線描画を組み合わせています。

「岩を抜ける風」

科学者は、物質が空間と原子からできていると教えてくれる。この作品では、岩が透明で、その中を空気が通っています。

「雲岩」

柔らかい雲のような岩の中心に空間を置いています。

「筆から流れる」

私ではなく、筆が描いたように感じました。

「筆からの眺め」

筆が私を導いてくれるのを感じました。フォルムとフォルムの間のスペースが重要です。

栗本夏樹 Kurimoto Natsuki …… p.28

1961年大阪府生まれ。
1987年京都市立芸術大学大学院美術研究科漆工専攻を修了する。在学中より個展を中心にした作家活動を展開し、漆造形（漆を素材にした造形表現）分野を牽引する。作品は、ヴィクトリア&アルバート美術館（U.K.）、フィラデルフィア美術館（U.S.A.）、ボストン美術館（U.S.A.）、ミネアポリス美術館（U.S.A.）などにコレクションされている。

—

「銀河の茶室」

漆石を茶室に散りばめるインスタレーション作品です。茶室が宇宙と繋がる装置になればと願っています。

黒川徹 Kurokawa Toru …… p.18

1984年京都府生まれ。
メビウスの輪やクラインの壺のような、内と外のない数学的な造形を制作する。素材は主に陶や鉄を用い、これまで約10カ国で滞在制作を行なっている。近年は、ザ・サウザンド・キョウトやCross Hotel Kyotoなど、公共空間のアートを手がけるほか、フランス・パリでRising Talent Award Craftを受賞。またN'SO KYOTOによるコンサートでは、弦理論をテーマとした音楽彫刻〈セラモフォン〉を制作している。

—

「アクレーション」

アクレーションは、細部からの増殖を意味する言葉。自然の法則にしたがって形成されていくかたち、林のなかでどのような存在になるのだろうか。

小松千倫 Komatsu Kazumichi …… p.14

1992年高知県生まれ。音楽家、美術家。
これまでにBUS editions、flau、NINA等のレーベルやパブリッシャーより複数の名義で膨大な数の音源をリリース。また、情報環境下における身体と表象の関係、その保存について制作・研究している。主な展覧会に『Standing Ovation｜四肢の向かう先』（旧ホテルニューアカオ、静岡、2021）、『惑星ザムザ』（牛込神楽坂、東京、2022）など。

—

「Distant of Harmony (Hall)」

スクリーンには朝10時から夕方17時（日没の頃）までの7時間かけて映像作品が再生される。同じ空間内に、1分でループするとある映像を、バラバラにしたLEDディスプレイに表示させ、ファイーバーケーブルによってそれらの光をさらに細かく分解する発光装置が置かれている。7時間と1分、二つの単純なシークエンスの間にある差分や複合を調律する取り組み。

柞磨祥子 Taruma Shoko …… p.13

1991年生まれ。
漆の黒にみる深みに魅せられ、液体のような自由な形態を「陰翳」の現代彫刻として表現している。近年、日本と東アジアの古き良きものを取り込み、古美術をマテリアルにして、古伊万里や景徳鎮白磁などと漆を調和させたシリーズを発表。また狩野派の重要文化財と同じ空間での発表、「幽玄」なる精神性と溶け合う金箔シリーズなども手がける。2021年京都市芸術新人賞受賞。

—

「torsion 2」

光によって変化する深い黒。歴史の流れと、流動的な流れの形。曲面と漆の黒が、庭園や建物を取り込むインスタレーション。

出口鯉太郎 Deguchi Koitaro …… p.09

1960年京都府亀岡市に生まれる。
備前焼、信楽焼等の焼き〆陶や、釉薬、三彩の作品をつくる。1983年金重悳氏の元で陶芸の道に入る。1986年京都市立工業試験場陶磁器研修専科修了。1995年日本橋三越本店にて初個展。その後、高島屋京都店、大阪店、岡山店、名古屋松坂屋本店等にて個展。金重一門展やギャラリー等で個展やグループ展を開催。

—

「信楽花入」

花が活きる様に自然な焼け狙いました。

西久松友花 Nishihisamatsu Yuka …… p.10

1992年京都府生まれ。
宗教的象徴物や歴史的文化的背景を持つものの形や装飾を土で象形し、再構築する事で独自の装飾表現へと繋げ、再解釈を試みている。鑑賞者の潜在的な記憶の一部分に触れる事を目的の一つとしている。主な展覧会に「KYOTO ART LOUNGE EXHIBITION ベールの光景」COCON KARASUMA 2Fアトリウム（2022）、「国際工芸アワードとやま2020」富山県美術館（2020）など。

—

「常花」「常花」「炎華」

私たちは無意識的に死後の世界の存在を信じているのかもしれない。現在に至るまで、人は様々な方法でその世界を表現し伝えてきた。多種多様な死生観があるが、日本では主に浄土や地獄といった死後の世界の概念が浸透しているように思う。その概念によって時に人は自身を律する事もあるだろう。本来、浄土に自然は存在しないとされている。樹木や花は金、銀、宝石などで構成された「宝樹」と呼ばれるもので、完全に人工環境なのである。これは一見意外に感じるが、動植物やものを含む自然を人の領域から切り離して考えてきた我々には然るべき事なのかもしれない。モノや情報が溢れ、感受性を失った社会が形成されつつある。日々に翻弄され自身の存在が朧げになりそうな中に、そんな社会から離れた世界に思いを馳せ、憧憬の念を抱いている。そして浄土にはどんな花が咲いているのだろうかと想像するのである。

西久松吉雄 Nishihisamatsu Yoshio …… p.10

1952年京都市生まれ。
1979年京都市立芸術大学美術専攻科日本画専攻修了。1984年亀岡市に自宅兼アトリエとして居住する。自然との共存から生まれた地のかたち、それが様々なかたちになって今日の風景がある。生活空間を構成する山、川、道、集落、杜のかたちに思いを込めて描いていく中で、風景のかたちを考えるようになる。

—

「丹の風景」「京丹波」「古社の風景」

古代の丹波国は、亀岡盆地・福知山盆地・篠山盆地があり、互いの間を山地が隔てている地形である。丹波国の中心地とされる丹波国分寺跡には、大イチョウの樹があり印象に残る。周辺の田畑の中に千歳車塚古墳があり、古代の風景を感受し丹波地域を描き始めた最初の地であった。自然との共存から生まれた地のかたち、それが様々なかたちになって今日の風景がある。山、川、道、集落、杜のかたちに思いを込めて描いていく中で、丹後から口丹波までの自然地形にある暮らしの風景を描いてきた。その中で象徴的な茅葺きの家と積みわらのある風景に何か郷愁をそそられる。

ベリーマキコ Berry Makiko …… p.22

日本画家。1975年京都府亀岡市生まれ。
自然児として里山を謳歌。1999年大学卒業後メトロポリタン美術館フェロー。2008年帰亀。抽象と具象を織り交ぜ生命の慈しみを表現。ダークなファンタジー。第4回京都日本画新展大賞。第2回藝文京展優秀賞。京都日本画新展in二条城～ 100人の画家・嵯峨野線を旅して～。2021第8回東山魁夷記念日経日本画大賞入選。2021年今治市大三島美術館企画展。京都日本画家協会会員、Willpower Arts Institute代表。

—

「一本道」「もう一つの故郷」「まわり道」「Utopia」
「ミノル」「シトラス」他

鑑賞者の皆さんがいろいろ想像して観ていただけたら本望です。

松井利夫 Matsui Toshio …… p.06

1955年大阪市生まれ。
1980年京都市立芸術大学陶磁器専攻科修了後、イタリア政府給費留学生として国立ファエンツァ陶芸高等教育研究所に留学。エトルリアのブッケロの研究を行う。帰国後、沖縄のパナリ焼、西アフリカの土器、縄文期の陶胎漆器の研究や再現を通して芸術の始源の研究を行う。近年はたこつぼ漁、野良仕事に没頭し人間の営みが芸術に変換される視点と場の形成に関する研究を重ねる。公開講座「ネオ民藝」運営。現在：京都芸術大学教授、滋賀県立陶芸の森館長、IAC国際陶芸学会理事。

—

「つやつやのはらわた」

土に触れるということは、指先で土の声に耳を傾けることだ。触圧や、土の湿り具合によって揺らぐ感触は、人の身体の触れ合いにも似て、指が自然に形をなぞり始める。
その指先と土の対話から生み出される親密な物語が土に命を宿らせ土が形を生み出してくれる。1万年以上も続いた土器作りの生活ってどんなだっただろう。昼の世界以上に、闇の世界への畏れと奥行きを知っていた人々の目には、夜の漆黒の質感や温もりや湿り気から、闇の向こうからやってくる何者かを感じ、生け捕る術を持っていたに違いない。見えないものを見、形作る術を持っていたに違いない。
マリ共和国のバンバラ族の呪物にBOLIというこぶ牛の像がある。泥で覆われた表面に鶏やヤギの血が塗りたくられ、まるで内臓が反転したような不思議なオブジェには、目も鼻も口もないのに肛門がある。その指一本の小さな穴は反転する宇宙の入り口だ。私はその小さな穴からのぞき見る宇宙を夢見るのではなく、その穴に体をねじ込み、漆黒の闇の光を全身に浴びてみたいと思う。それは五感全ての領域を横断し、私の全体性と宇宙との合一を追体験することになるだろう。この地上に産み落とされた皆が忘れてしまった、あの闇に包まれた胎内の記憶を紐解くために、そっと頭を差し入れる。

明主航 Myoshu Wataru …… p.34

1990年京都府生まれ。
京都精華大学芸術学部陶芸コース卒業後、亀岡にて自身の活動を始める。時間経過によって生まれる美、素材が持つ質感や風合いをテーマに制作表現している。今年から匣（はこ）をもう一つのテーマに制作。素材：陶土・石・ガラスなど。

—

「匣」

匣（はこ）をテーマに作品を制作。今年から匣を制作し始め匣とは何かを考えています。今回制作したものは匣の作品の中で最も大きいものを制作しました。制作方法や大きさを変えることにより先ほどの問いをいろいろな方向から模索し認識の幅を広げていきたいと考えています。

森太三 Mori Taizo …… p.28

1974年大阪府生まれ。
1996年の初個展以降、個人の身体感覚によって生みだした小さなカタチを集積させて、展示空間内に架空の風景を表出させる作品を発表。2014年「STUDIO森森」設立。展覧会企画や展示設営、ワークショップなどの美術に関わる様々な活動を展開。現在、亀岡市内のアトリエにて制作を行っている。みずのきアトリエ講師・みずのき美術館インストーラー。京都芸術大学・京都精華大学・成安造形大学非常勤講師。

—

「海を眺める」

海岸で石を拾った。ふと海の先を眺めた。過去と未来が重なった。この世界にある様々な断片。それらを再構成して眺めてみる。

八木良太 Yagi Lyota …… p.32

1980年愛媛県生まれ。
見たいものしか見ない・聞きたいことしか聞かないといった、我々の制限的な知覚システムあるいは態度に対する批判的思考をベースに作品制作を行う。既製品を用いて作品を構成し、その現れによって人間の知覚やそれを利用した工学的システムを浮かび上がらせるような作品を発表している。音響作品をはじめとして、オブジェや映像、インスタレーションからインタラクティブな作品など、表現手法は多岐にわたる。

—

「Sound Sphere」

球体に巻かれたカセットテープと、それを再生させる装置によって構成されたインスタレーション。球体は温室内に置くことで、音の果実のように見えてきた。温室のガラス面に取り付けられた振動スピーカーから聞こえてくる音もまた、環境と響き合うことで、有機的なものに聞こえてくるのではないだろうか。

YUKO KIMOTO …… p.21

1985年横浜に生まれる。
ロンドン芸術大学セントラルセントマーチズカレッジにてファッション科を専攻。卒業後、CHANELなどグランメゾンでテキスタイルデザイナーとして経験を積み、独立。帰国を機に絵を描きはじめる。現在は京都を拠点に活動中。2021年にはパリのルーブル美術館にて3作品を展示。三菱電機のアートプロジェクトに第一弾アーティストとして作品提供など活躍の場を広げる。

—

「My son in wonderland」

わたしはペン画を描く時、「息子の頭の中をのぞいたら、どんな風景なのだろう。彼の心が、いつも愛でいっぱいであるといい。」と願い、勝手に想像し、描いています。本作では、その「息子の頭の中」に入り込んでしまったような体験を作品にしたく、小さなテントの中に絵を描きました。ひと針ひと針、手縫いで絵を紡ぐことは大変な仕事量でしたが、作品をご覧になる方々には、是非刺繍ならではの立体感や質感を体験していただきたいです。

吉田伊佐 Yoshida Isa …… p.06

1959 京都府南丹市日吉町に生まれる
1984 京都市立芸術大学美術学部（油画専攻）卒業
1986 日吉ダム建設により亀岡市千代川町に集団移転
1999 これより全国の百貨店、画廊で個展を多数開催する
2011 日展特選受賞
「時を超えて～静物と風景画展」（ホキ美術館）
ART EXPO NEWYORK（NewYork）Lineart 2011
2013 「光と風をかんじて・・展」（ホキ美術館）
2014 「吉田伊佐展～日本の原風景を追って～」
（南丹市日吉町郷土資料館）
2019 南丹市立文化博「芦生の森」～森の魅力を探る～
（南丹市立文化博物館）
など多数。

—

「草・木・陽」「上谷の老樹」「緑陰」

様々な自然との邂合によって生まれた作品である。「草・木・陽」は自宅近くの行者山の木々「上谷の老樹」は芦生の森の朽ちた樹根「緑陰」は清滝川の陰陽。これらの「自然」から受けたインスピレーションを最も感じさせる場面を切り取り絵画にしたものである。

渡辺信喜 Watanabe Nobuyoshi …… p.12

1941 京都市に生まれる
1964 京都市立美術大学日本画科卒業
1966 日展初入選、晨鳥社入会、山口華楊に師事
1970 日春展奨励賞（同'71年）
1971 日展特選（同'84年）
近年では、
2018 個展（高島屋京都、大阪、東京、横浜）
2019 個展（堂本印象美術館）
など多数。
現在日展理事、新日春会会員、京都精華大学名誉教授。

—

「牡丹」「茄子」「蓮」

WONG Chung Wah + FOK Ching …… p.17

香港出身、京都在住のWONG Chung Wah ウォン・チャンホワ（アーティスト／デザイナー）とFOK Ching フォック・チン（版画家）。領域横断の媒介と展示手法を用い、日常の営みにアートを持ち込む。瀬戸内国際芸術祭2019の出展から始まり、人々が芸術に出会う場をつくっている。

—

「もの干し祭り ー共にものを干すプロジェクトー」

洗濯物を干すという行為は古くから人間共通の習慣ですが、そのなかには自然の力と恵、人間の営みがあります。普段家族の生活にある「干してもらう」「干してあげる」を、観客と一緒に行うことで「家族」の意味を広げていきます。ものを干すという行為、服の記憶、そして「干してもらう人」と「干してあげる人」の間に、新しい関係を築いていきます。

EVENTS

❶

❷

❸

❹

関連イベント

［ツアー］

展覧会を巡るツアー …… ❶

10月15日(土)・16日(日)・22日(土)・23日(日)　10:30–12:00

—

展示会場を巡るツアーに合わせて出展作家に在廊していただき、作家の解説を聞きながら実際の展示を鑑賞しました。

［ツアー］

城下町を巡るツアー …… ❷

10月25日(火)　10:00–12:00

—

「亀岡祭」の山鉾巡行にあわせて、亀岡で生まれ育ったコーディネーター並河杏奈さんと一緒に城下町を巡るツアーを行いました。

［ワークショップ］

植物標本をつくろう! & 植物園ガイドツアー …… ❸

10月16日(日)　10:30–12:00 ／ 13:30–15:00
開催場所：丹波亀山城跡内花明山植物園
講師：澤田徹(花明山植物園)

—

植物園ガイドツアーでは、約1000種の植物が自然のままに生育されている花明山植物園を、植物を管理する澤田徹さんと共に巡り、城跡に関係する植物などを観察しました。植物標本づくりでは、植物標本を台紙に貼り付ける作業を体験しました。

［ワークショップ］

「要らない写真」を持って外に出よう …… ❹

10月22日(土)　13:00–15:00
開催場所：丹波亀山城址周辺
講師：加納俊輔(アーティスト)

—

普段から何気なく行っている「写真を見る」という行為を、少し違う角度から体験してみようと、印刷した写真をもってまちに出かけ、撮影を行いました。写真を“本来の文脈“から切り離して見ることで、「ものを見ること」の感じ方の変化を楽しみました。

❺

［マルシェ］

ボンボンマルシェ Vol.5 @城跡芸術展 …… ❺❻

10月23日(日)　10:00–17:00
開催場所：丹波亀山城跡広場

—

亀岡市内のモノ・ヒト・食の「循環」をコンセプトに、地域に新たな循環を生み出し、愛着の湧く日々をつくるマルシェ。今回は「物々交換市」や「家具のお直し」、「体験・ワークショップ」に加えて、亀岡の手作り作家によるクラフトマーケットや亀岡産の食材を使った美味しい食のマーケットも登場しました。

［パフォーマンス］

外骨格恐竜「うちのシロ」 …… ❼

10月23日(日)　11:00– ／ 13:00– ／ 15:00–
会場：丹波亀山城跡広場

—

プラスチックダンボール製の「うちのシロ」がマルシェ会場内を練り歩き、ワークショップで手づくりしたミニシロたちが後をついて歩く場内ツアーも行いました。

❻

❼

城跡芸術展

2022年10月15日(土)－25日(火)

会場
—
丹波亀山城跡(大本本部)

主催
—
かめおか霧の芸術祭実行委員会
亀岡市

協力
—
宗教法人大本
亀岡祭山鉾連合会

助成
—
文化庁
令和4年度
文化庁 文化芸術創造拠点形成事業

参加アーティスト(五十音順)
—
荒井優作
安藤隆一郎
稲あゆ美
岩野勝人
ACOON HIBINO
大石早矢香
大村大悟
奥村博美
金重尹郎
加納俊輔
クリスティーン・フリント・サト
栗本夏樹
黒川徹
小松千倫
柞磨祥子
出口鯉太郎
西久松友花
西久松吉雄
ベリーマキコ
松井利夫
明主航
森太三
八木良太
YUKOKIMOTO
吉田伊佐
渡辺信喜
WONG Chung Wah + FOK Ching

企画
—
辰巳雄基
奥岡莞司

スタッフ
—
生松ひろみ
石橋瑚子
市野雪乃
出射優希
大西香菜子
奥岡なぎ
川端菜々美
北山尚美
髙橋昭人
宅間紗矢
田中佐知子
冨田幸代
豊田光
中村悦子
藤原菜津美
真継薫
松本恭子
森國文佳
矢谷未来
山本美広
和田京子

什器制作
—
STUDIO森森

グラフィック
—
paragram

[城跡芸術展 ARCHIVE BOOK]

2023年3月 発行

編集	持田博行
写真	表恒匡
	岡田春樹(p.04, p.16, p.20, p.30, p.43)
	奥岡莞司(p.05)
デザイン	藤井良平(UMMM)
イラスト	植田遥菜
タイトルロゴ	paragram
発行	かめおか霧の芸術祭実行員会

facebook　instagram　公式HP

©2023 Kameoka KIRI Art Cultivation